

千年の歴史と伝統が残る古都・京都に
連綿と受け継がれる文化と芸術。
先人たちの教えと伝統を守り、
未来へつなぐ思いと精神が
京都をより豊かな文化都市へと育む。
今回、京和傘日吉屋5代目当主の
西堀耕太郎さんに
京和傘の魅力と伝統について伺った。

西堀耕太郎

京和傘日吉屋5代目当主



「伝統は革新の連続」 時代が求めるものを作り続ける

日吉屋は、江戸時代後期創業。初代墨藏が京都・五条の本覚寺境内に傘店を構えたことに始まる。2代目与三次郎の代に、宝鏡寺（京都市上京区）の門前に店舗を移して以来、百数十年にわたり京和傘を作り続ける。いまや京都で唯一残る京和傘の製造元だ。

元々、中国から日本に傘が伝来したのは平安時代以前。当初は魔よけや権威の象徴として、僧侶や高貴な貴族に使われていた。安土桃山時代

に開閉できる形となる。江戸時代中期に番傘やデザイン性の高い蛇の目傘が登場し、一般に広まる。

日吉屋5代目当主、西堀耕太郎さんによると「和傘は江戸時代に全国に普及し、1950年代に最盛期を迎える。全国で年間約1700万本作られていた。日吉屋も約50人の職人を抱え支店もあった」という。戦後、高度経済成長で生活様式が西洋化し、和傘の需要は減少の一途をたどる。



西堀さんは妻の実家の日吉屋で初めて和傘に出合う。色彩の美しさ、和傘でしか味わえない美の世界に感動し、家業を継ぐことを決意する。しかし両親には反対された。「当時の年商は168万円。廃業することが決まっていたが、多くの人に和傘の魅力を知ってもらおうと、インターネット販売を始め、社業を軌道に乗せた」

洋傘の骨が約8本に対し和傘は30〜70本。骨の数だけ工程があるといわれる。西堀さんは、義母などから和傘作りの工程を習い伝統の技術を身に付けた。日吉屋はほぼすべての工程を自社で行い、手作業のため完成まで約2週間を要する。祇園祭や葵祭、全国の祭事用和傘の制作のほか、修理、修復、新調も手掛ける。和紙は、越前和紙（福井県）、五箇山和紙（富山県）を和傘専用としてすいてもらっている。和傘の中枢部分「ろくろ」は、岐阜県の1軒でしか作れないという。伝統技術だけではなく、各地の職人たちによって和傘の高い品質が支えられている。

和傘の需要が増えない中、どうすれば生き残れるのか。和紙と竹の織り成す造形美、和傘の技術を生かして誕生したのが、和風照明「古都里―KOTORI―」だ。外部デザイナーや照明メーカーと共同開発し、国内外のホテルや店舗、住宅などでも使われるほか現在、世界約15カ国で展開している。

『「伝統は革新の連続」の信念のもと、今の時代が求めるものを作り続けた先に伝統がある。いくら美しく素晴らしくても使われなければ生き残れない。今後は、和傘の美しさと洋傘の利便性を兼ね備えた、新たな『第3の傘』と呼べる傘作りにも挑戦したい』と夢を語る。



©西堀耕太郎（にしほり・こうたろう）
1974年、和歌山県新宮市生まれ。2004年日吉屋5代目を継承。国内外のデザイナー、アーティスト、建築家とコラボレーションした商品を発表し、国内外のデザイン賞を多数受賞。近年は自らの経験やネットワークを生かし、全国の伝統工芸や中小企業の商品開発、海外での販路開拓を支援するなど、地域のプロデューサー育成にも尽力している。著書に「伝統の技を世界で売る方法 ローカル企業のグローバル・ニッチ戦略」(学芸出版社)。

<https://www.wagasa.com>